

日本病院薬剤師会雑誌創刊40周年記念座談会

芽生えから大樹へ

—更なる向上を目指して—

日時：平成16年8月17日（火） 13：00～14：30

場所：渋谷クロスタワー31階 東天紅

出席：岩崎由雄，右川和夫，沼田とみ，安生紗枝子，山田勝士
関口久紀，司会：加野弘道

前列左から，沼田とみ氏，安生紗枝子氏，岩崎由雄氏，右川和夫氏，加野弘道顧問
後列左から，関口久紀専務理事，山田勝士現編集委員長

はじめに

関口専務理事挨拶

本日は，創刊以来2期4年以上編集委員長をお務めいただいた編集委員長の方々にお集まりいただいております。「日本病院薬剤師会雑誌」(以下，日病薬誌)は創刊以来，今年で40周年目に当たります。日本病院薬剤師会(以下，日病薬)の会員もだんだん若い方が増えてきて，過去の日病薬や日病薬誌の歴史がわからなくなってきているというような状況もありますので，日病薬や日病薬誌の過去の歴史が忘れ去られてしまわないうちに，記録として



残しておくのが必要ではないかと考えております。また，今後の会の運営や日病薬誌のあり方等に，色々な意味で参考になると思いますので，本日は先輩方の貴重なお話を伺わせていただきたいと存じます。司会は加野顧問にお願いしておりますので，加野顧問どうぞ進行のほうをお願いしたいと思います。

山田編集委員長挨拶

現在の編集委員長をさせていただいている山田でございます。本日は先輩方にはお忙しいなか，お集まりいただきまして本当にありがとうございます。関口専務理事のほうからお話がありましたように会員も増えてまい



りまして現在約36,000人ということでございますが、この日病薬誌がどのような生い立ちで、どのような経過をたどってきたのかということとを一度、会員の方々によく知っていただくのも大事だろうと思ひまして、全田会長にお願いして、この座談会を開催させていただきました。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

会誌のない時代の情報伝達は…

薬事新報が果たした役割

司会 早速ですが、本日の司会を仰せつかっております加野でございます。それでは早速始めさせていただきます。この日病薬誌が創刊されまして、今年で40年になるということですが、実は日病薬が創立されたのは昭和30年、そして日病薬誌が創刊されたのが昭和40年ということ



で、その間ざっと10年間は日病薬は会誌のない時代があったということになります。その間は一体、日病薬の活動状況はどうやって会員に伝えておられたのかという疑問があります。その点については、当時から日病薬で活躍されていた岩崎先生しかご存じの方はいらっしやらないのではないかと思います、一体どうされていたのでしょうか。

岩崎 私、岩崎でございます。日病薬の役員になったのは昭和43年からでございますが、そのずっと以前から日病薬のお手伝いをさせていただいておりました。司会の加野顧問のおっしゃったように日病薬が創立されたのが昭和30年、日病薬誌はもちろんございませんし、代議員会等の記録もほとんどなかったんです。日病薬の事務局もはじめの頃は、初代の不破龍登代会長の勤務されている三楽病院薬局が事務局のようなもので、そこに集まって相談をしていたというのが実情でした。その後、昭和33年頃に私ども親しかった業界紙の上野敬一氏が、病院薬剤師のために一肌脱いで、日病薬の協力誌ということで薬事新報社を設立し「薬事新報」という機関紙を創刊されたのです。

そして薬事新報社の一室をお借りして日病薬の事務局として使わせていただいていたという時代がありました。事務局はその後、東京大学農学部の近くに、小さな家があったのを見つけて、そこに事務局を移して一応事務らしいことをやるようにしました。

とにかく会長も副会長も、もちろん他の役員も全員現職のままで日病薬の仕事をやっていたので、事務局

といってもデスクもなければ何もない有様でした。日病薬という団体はできてはいても会誌もないというのは会員に対する情報伝達ができない。何とかしなくてはと、不破会長に申し上げたのですが、「ない袖は振れない」と不破会長を怒らせたことがあります。従って、昭和33以降は、薬事新報が日病薬誌としての機能を果たしていたということになります。

そして、ご存じのように不破会長のあとをされたのが東京大学医学部附属病院（以下、東大病院）の高木薬剤部長、その後が虎の門病院の上野薬剤部長で、上野会長は日病薬を基礎から築き直さなきゃいけないと、まず、自前の会誌を発行しようということになって、本格的に検討が始まったのです。しかし、会費を値上げしなければ発行はとてできない、中には自前じゃなくてもいいからスポンサーを見つけて出版してはどうかとか、大々的に広告をとれば金なんてなくてもできるじゃないとか、色々な意見がでましたが、「じゃ、あなたやってください」と言うともみんな逃げてしまうという状況でした。

上野会長は、末端の会員まで全会員に日病薬というのがどのような組織で、どのような活動をしていて、病院薬剤師にどうかかかわっているのかを知らせるには、活字媒体しかないんだからと、広報委員の数を2倍くらいに増やして、どうやら形のうえでは広報委員会らしいものができたんです。しかし、皆、雑誌の編集に関しては素人なので五里霧中でやってきたのですが、その経緯は日病薬誌の回顧録にも書きましたのでお読みいただければと思います。

司会 薬事新報社の初代の社長は上野氏で、その上野社長と岩崎委員長は親しかったと伺っておりますが、その上野社長が日病薬の協力誌という趣旨で薬事新報を発刊しようとしたというのは、どのような経緯だったのかご存じでしたらご紹介いただけませんかでしょうか。

岩崎 当時、私は東大病院の薬剤部におりまして、野上壽薬剤部長に上野氏を紹介され、「話をよく聞いておくように」と言いつけられたのがはじまりです。上野社長は読売新聞のお仕事をなさっていたそうですけれど、上野社長のお話は、聞くところによると「日病薬には機関誌もないそうだが、当時の業界紙はすべて薬業界や薬事一般に関する報道をしていて、病院薬剤師の分野を中心に報道するような業界紙はなにもない。それでは病院薬剤師のために、日病薬の活動を中心とした雑誌をつくりましょう。」と提案されたのです。上野氏は、早速、不破会長に話を持っていき、正式に薬事新報を創刊しようということになったのです。昭和33年7月5日号が第1巻、創刊1号なんです。当初は、旬刊誌でしたが日病薬



の情報誌はこれしかなかったのです。

司会 当時の日病薬の記録がないんですよ。

岩崎 僕も記録をとるということをやられていたんですけど、それが事務局の度重なる引越しでどこかへ行っちゃったんじゃないですかね。

司会 あったんですか、記録は。

岩崎 皆さんに配るようなものにする前に、それをためておいたものを両岡事務局長と一緒に整理したことを覚えているんですがね。

司会 結局、昭和33年から会誌が発行される昭和40年までの7年間は、この薬事新報が日病薬誌の機能を果たしていたと、そういうことよろしくね。

岩崎 というのが結果論ですけどね。だけれど、その間の経緯、なぜそうなったかということは不破会長と上野社長との話し合いによるもので今となっては知るよしもないわけですよ。

司会 あの世に行って聞いて来なくちゃならないようですね(笑)。

岩崎 いや、もうお盆も過ぎましたんでね(笑)、この座談会はちょうどいい日を選んだと思ってね…。

司会 薬事新報が今でも発行されておりますが、日病薬にとっては大恩人といわなくてはなりませんね。

昭和40年会誌発行当時の日病薬

司会 それで、いよいよ日病薬誌を発行しようということになり、当時のことは岩崎先生が創刊20周年特集号に詳しくお書きになっておられますが、それによりますと、昭和40年当時、会費が200円であった。200円ではとても会誌の発行はできないので、会費を400円に値上げをして、会誌を発行しようというような意見になったそうですが、それでも400円に値上げするのは反対だというような声があったそうですね。

会を創っておいて会誌がないなんて今では考えられないけれど、当時は、そういうような雰囲気だったのですね。

岩崎 それと同時に名簿もないんです。失礼ですけど、現在でも日病薬として自前の名簿はないですよ。

司会 名簿は薬事新報社が制作して販売しています。

岩崎 でしょう。ということでそれを不破会長に言ったら、「バカヤロウ、つくりたいならおまえが金出してつくれよ」と。日病薬として色々努力して、団体としてま

ともな形に整ってきたのが上野会長の頃ですね。

とにかく根本は資金、200円の会費じゃ送料だけでも無理、印刷なんでもってのほかで、一番苦労されたのが、日病薬ニュースの時代の久保文苗(関東通信病院)編集委員長で当時、日本薬剤師会は高野一夫会長の時代に「日本薬報」というタブロイド版の週刊誌みたいなのを出していたんです。

日病薬誌の姉妹編「病院薬学」の創刊

司会 そういうことで日病薬誌を発刊してから10年くらい経つと、今度は日病薬誌の姉妹編として「病院薬学」が創刊されてますね。これを創刊された時の経緯はどうだったのでしょうか。

岩崎 あれは幸保文治氏(日本大学板橋病院)がやはり日病薬の回顧録〔日本病院薬剤師会雑誌, 40, 666-667 (2004).〕にお書きになっていたんじゃないですか。

司会 当時は日病薬誌に、論文がどんどん増えていたということですか。逆に日病薬誌に投稿する人がいなかったということですか。

岩崎 いなかった。だから記者が自分で記事を集めてくるという時代でした。「薬剤学」という雑誌があるんですけど、その「薬剤学」が病院薬剤師の唯一の学術論文の投稿する場だったんです。ところが、それをいつの間にかメーカーに乗っ取られてしまいました。日病薬誌は、学術誌としては認められていなかったわけです。ちょうど米国ではクリニカルファーマシーという雑誌が創刊された時だったんです。それで米国病院薬剤師会のOddis氏が初めて、訪日した時にその話をしたら、会誌をプラクティカル・エディションと、それからサイエンティフィック・エディションと2種類出せばいいじゃないかという意見をいただいたのです。

一同 なるほど。

岩崎 それはいいというので、会誌を第1部と第2部にしようとして、当時の桜井喜一会長に相談したら「日病薬は現状でも台所が苦しいのに無理だ」と、しかし「その件は、オレに任せろ」とおっしゃるので「じゃ、会長お願いします」と帰ったら桜井会長が薬事新報じゃなくて薬事日報に話を持って行って、「薬剤学」を日報で出しているから「病院薬学」を一緒にやってくれないかと、交渉して「病院薬学」が発刊されることになったのですよ。

司会 日病薬の会員が論文を発表する場がないから、そういう発表できる雑誌がほしいということでしたわけですね。

岩崎 あるけれども受け付けてくれないから、といっ

たほうが正しいと思うんです。

右川 なるほどね、「薬剤学」とかそういったのでは、なかなかね。

岩崎 「薬剤学」に載せるには相当レベルが高くないと。昔「薬剤学」には本当に、ひどいことを言われたんです。

創刊20年目の日病薬誌

司会 そういう経緯で日病薬誌の姉妹編、サイエンティフィック・エディションを創刊しようとされたのですね。それで、創刊以来20年目の年に右川委員長が引き継がれたようですが、その頃の日病薬誌はいかがだったでしょうか。

右川 右川でございます。岩崎委員長の下で10年ほど委員をやっておりまして、昭和59年4月から、広報委員長を担当致しました。会誌は皆様ご存じの通り、編集作業が終わって2ヵ月後に発刊されるので、私が委員長として名前が載ったVOL.20の6月号からということになります。その頃は、日病薬では会長を代議員会で決めるというように変革した時期だったんですね。それで、はじめて桜井会長が選出されたのです。当時は会誌は非常に薄くて紙面が足りなかった。今も岩崎委員長のお話にもありましたように、一般論文というのは一応は集まっていたんですが、ページ数からいって2題くらいしか載せられないんですね。

司会 頁数に制限があって1回に2題しか収載できないということだったのですか。

右川 そうですね。あとは会員報告とか日病薬の代議員会議事録とか、各病院薬剤師会（以下、病薬）の動きとか、そういうようなものを載せていたんです。

司会 その論文の投稿は、掲載されているもの以上に集まっていたということですか。

右川 僕がはじめたころはありました。岩崎委員長がはじめられた時点ではそんなになかったんですね。

岩崎 依頼をして書いてもらっていた。

右川 それで実際には、その頃、色々企画を立てて、投稿を依頼しましたところ、たくさん集まってしまってますね。それで一般論文の特集をやってみたりして、一時逃れをしたりなんかしたことを覚えています。一般論文といっても、広報委員では学問的に優秀な論文と、そうでないものと分けるということはとてもできないし、そこにちょうど「病院薬学」ができたわけです。それで学術論文は病院薬学のほうへ回せるようになりました。日病薬誌のほうには実務的に即した報告、会員の業務に役立つようなものを載せようということにしたのですが、

それもなかなか難しかったですね。

司会 といいますと。

右川 どういう選び方をしていいか、一般論文にすべきものなのか、研究論文にすべきものなのか判断が難しい。そういう時期もありまして、何とか「病院薬学」と日病薬誌に分けて掲載していました。岩崎先生、あのころは第1部と第2部と分けたんですか。

岩崎 いや、分けなくて、幸保氏が書いているけど、幸保氏は日病薬誌と病院薬学と両方の委員をやっていて、その時にレフリーをおこななければ学術誌として認められないからと、薬学雑誌を参考にしてきちんとした投稿規定を作ったのですよ。

司会 そうすると、そのサイエンティフィック・エディションとして「病院薬学」を創刊し、日病薬誌のほうはプラクティカルな会員報告と切り分けて掲載されていたんですね。

右川 そのプラクティカルなものにもレフリーをつけようよ。

岩崎 それはなるべくこっちで直して挙げましょうという。

司会 そういう意味のレフリーですね、なるほど。

右川 会員にも色々いましたから。

司会 サポートしようというような。

右川 委員でもって分担して、集まった原稿を3編ずつみんなで持って帰って読んで、どうもこれはおかしいやというところを直して、これでよろしければ書き直して出してくださいと言って。

司会 なるほど、選別しようというレフリーじゃなくて。

右川 むしろ助ける…。

岩崎 自衛隊みたいなものですよ（笑）。

司会 なるほど、なるほど、よくわかりました。それで右川委員長の時代に印象に残ったようなことって何かございますか。

右川 一番印象に残ったことは、失敗談になるんですけど、病院薬学のほう、いわゆる研究論文ですね。学位をとるための論文が、たまたま日病薬誌のほうに回って来たんです。それは事務局のほうにもミスがあったんですけれども。それこそ学位論文をレフリーできるような立場じゃないし、そのまま受けて掲載しちゃったんです。載せちゃったんですよ。



司会 すごい論文を。

右川 そう、すごい論文を(笑)。

司会 「病院薬学」のほうへ回すべきものだったわけですね。

右川 某教授から、もうすごい剣幕で電話がかかってきましてね(笑)。もう平謝りに謝りました。謝っても始まらないんですよ、何年か研究したものが、事もあろうに会員報告として日病薬誌に載ってしまった。

岩崎 レフリーがしっかりしていないということですよ。

右川 そうなんでしょうね、結局はそういうことだったんでしょうけれども。あれだけはもう…(笑)、僕の時代の最悪のできごとでした。

平成時代の日病薬誌

司会 ありがとうございます。次には沼田委員長は、またそれから10年くらい経って確か平成元年からだと思うんですが、実はその前に1年だけ私が編集委員長を務めておまして、あとを全部押しつけてしまって、沼田委員長には本当に申し訳ありませんでした。そんなわけで、色々ご苦労されたと思うんですが、その時代のことをお聞かせください。

沼田 私は高橋則行会長の時にお声をかけていただきまして、雑誌の編集をやれということで、お席を汚ささせていただきましたけれども、私が出るについては理事会で何かあったみたいで…(笑)。

司会 いや、何かというようなあやしい話ではなく(笑)、会員の数では女性のほうが多いのに、役員は男ばかりというのはおかしいというような意見がありまして、日病薬も女性をもっと登用していかないと時代に合わないのではないかと反省されたようなんです。是非女性の理事をとということで沼田先生に理事になっていただいたということだったと思います。

沼田 会誌としてはもう完成されていたというのがそのころの印象でございましたから、何か手を加えるとかそういうことはあまりなかったと思うんですね。しかも編集委員の方がベテランでしたから、私よりもよくご存じでしたから、何も苦労することはなかったんです。

ただ、会員報告と、病院薬学へ載せるべき論文の振り分け、そういう問題はありました。

司会 そういう振り分けはレフリーがなさっていたわけですか。

沼田 はい、そうです。それと、一番大変だったことは、予算のなかで一番大きなウエートを占めているのが会誌の発行ということで、雑誌制作費の節減はできない



かといわれました。私は抵抗があったのですが、岩崎委員長からの頃から、全国に誇るべき会誌として、一番上等な紙を使っていらっしたんですね。その紙質を落として節約することが一番手取り早いということになりまして、色々な質の紙を持ってきてもらって検討しま

した。たぶん現在も同じ紙だと思うんですけども、前の時代の日病薬誌を知っている人からすれば、紙質が見劣りすると思います。それから雑誌の編集業務等も、事務局との間に入って委員が順番に手伝っていたということがありまして、手作りの時代から脱皮する転換期だったような気がします。その後、編集業務に薬事新報社から1人経験者に入っていただいて、やっておりました。雑誌社の人間が編集委員会に参加するということについては、委員会でもちょっと問題になったのですが、取材等は一切関係なく、ただ編集にかかわるだけということで諒承してもらっていました。さらに値下げ交渉をして、印刷・製本業者も変えて経費節減に努めた時代でした。表紙のデザインの変更についても、10種類くらいの中から、委員が選んで最終的には2つ選んだ中から私が選ばせていただいたという経緯がございます。

右川 それまでは、色々な病院の写真を表紙に載せていました。

岩崎 日病薬誌の第1巻、第1号には、東大病院の写真を載せたんです。というのは会長が高木氏だったからですが、それがきっかけで各都道府県の病薬会長の病院の写真を載せていけば、おらが村の大將もここへ載って文句言ってるよと、全国の会員も意識を持ってくれるだろうというので、全国の病院を回ったんです。そうしたら、なぜおれのところを早く載せないんだと文句言うやつが出てきて(笑)。

右川 岩崎委員長、その当時の病院の写真が載っていた時代には、巻頭言はその病院の薬局長がお書きになってましたよね。

岩崎 結局、各病薬の会長ですよ。鹿児島県だったら、鹿児島大学医学部附属病院の写真と山田会長に巻頭言を書いていただくのですよ。

山田 巻頭言を書く、そうでもございましたか。

沼田 あれ、よかったですよ。

安生 そうすると年12回になっても、47都道府県で4年あればグルッと一回りはできたわけですね。

司会 沼田委員長の頃までは、4月1日発行の4月号

が実際に会員の手元に届くのは5月になってからという
ようなことでしたよね。

沼田 以前はそうでした。

司会 1ヵ月遅れた会誌が来るというのは会として
みっともないですよ。速報性という点ではゼロですよ
ね。それを発行日通りに、会員の手元に届くように改め
ていただいたのも、沼田委員長の時代ですね。

沼田 印刷・製本業者を変える時に、発行日通りに制
作して発送することを条件にしましたから。発送業務も
発行部数が多くなれば手間がかかりすぎて、事務局でや
るのは無理だったのです。制作も発送も印刷業者に一括
して任せました。それでようやく発行日通りに届くよ
うになりました。

司会 これは編集委員会としての大きな業績ですね。

地方編集委員は昔からあった…?

沼田 日病薬誌って日病薬ですから全国誌ですよ。
全国誌なのに地方の人たちの声を吸い上げるページって
いうか、そういった部分がないような気がしまして、理
事会に提案して、地域の編集委員っていう人たちを各ブ
ロックから指名していただいて、1年に1回みなさんの
意見を聞くことを始めました。

司会 なるほど。そういう地方の意見を聞くというよ
うなことは、以前はなかったのですか。

岩崎 実は、上野会長の時代に全国の病薬をブロック
制にしたんですが、そのブロックから地方の編集委員と
して代表を編集委員会に参加させたんです。そして年に
一回、薬学会の時に集まって意見交換をやってました。

司会 いわゆる今で言う地域編集委員っていうもので
すね。それをもうこの頃から…。

沼田 私が引き継いだ時には、それはなかったですよ。

岩崎 それは、こういうことなんですよ。後で聞いた
話ですが、ある年の学会で、そこの開催地の病薬の役員
が世話をしてくれていたのですが、昼飯会としてやった
んです。それは、やりましたよね。

右川 それは僕の時代までずっと続いてました。

司会 そうですね。そのあと、いつの間にか立ち消え
になったんですね。

岩崎 立ち消えた。そのあとは僕、病院をリタイヤー
しましたので全然知りませんけど…。

司会 昭和62年まで右川委員長がおやりになっていて、
その時まであったわけですね。

右川 あったんです。

司会 そうすると、その後の編集委員長というと、杉
原委員長か私が、それをやめてしまったということにな

りますね(笑)。戦犯は私かも知れません。申し訳ありま
せん。

山田 その当時の学会というのは薬学会ですか。

岩崎 日本薬学会です。

右川 私がそういうブロック会をやったりした時は、
薬学会を利用したんですけれども、その時ちょうど山田
栄一氏が事務局の広報担当で、事務局から一緒に行って
くださったんですね。それでたまたまその時は日病薬か
らお金が出てるわけです。それで皆さん色々な連絡をと
って全国的な連絡をとりながら企画を立てていたわけ
です。

女性時代の到来

司会 沼田委員長のあとが安生委員長になりますね。
安生委員長時代の日病薬誌というか、編集の方針みたい
なものを何か。

安生 そうですね、今、沼田委員長がおっしゃった色
々な問題を私は引き継いだという感じですね。私自身と
しては急きょ編集委員長にということでしたが、それま
で何も日病薬にはかかわっておりませんでして、本当の
ことをいうと、この日病薬誌もあまり見ていなくて
(笑)、こんな役を引き受けられるのかなと思ったくらい
なんですけれど、改めて見てみるとなかなか立派な雑誌
じゃないかと思いつくと思いました(笑)。

編集委員長という立場から、自分も女性でしたので女
性の委員を多く入れたいと思ったのです。半分は女性に
したいと思ひまして、女性の編集委員4名の方に入っ
ていただいて和気あいあいとやったという(笑)ことです。
当時の議事録を読み返してみると、最初の挨拶で、これ
までの内容に加えてより時局に即したテーマや実務的な
テーマを取り上げていきたいというようなことを方針と
して述べていました。

それから、先程から話題になっているブロックの話で
すけれども、これも地方編集委員という言葉でここに出
ていますね。地方編集委員より各ブロックの現況報告と
いうようなことを必ず入れるようにしていったのが、平
成6年7月からです。私になりまして第2回の委員会だ
と思えますけれども、各地域の連絡網ですね、そういう
ものをしっかりしたいと、そういう工夫をどうしたら
いかということをおもひながら考えました。あと編集委員
の意見として各病薬誌の中からいいものを日病薬誌に載
せたらどうかというようなこともありました。

そんなことで各ブロックの、私もこの日病薬誌とい
うのは中央だけではなく地方の意見を取り入れたいと、真
剣に考えました。それで1年に1回集まっていたいて



合同の編集委員会を開いて、起こっている問題等を提案していただきたいとお願いしていました。あまり活発に意見があったようには思いませんけれども、ご意見をいただきながらやってきたということがありますね。

岩崎 何回くらい、地方のブロックというか地方にいらっ

しゃる編集委員が全体で集まっていたのですか。

安生 1年に1回ですね。7月に必ず合同編集委員会として…。

岩崎 それは学会とは関係なくですか。

安生 関係なくです。いつも行っている編集委員会の時にあわせてです。

右川 その旅費くらいは日病薬も出せるようになったということでしょうね。

安生 そうです。旅費は出していたんですね。それから、原稿については特に事務局のほうとも一生懸命になって、例えば集まらないと電話を入れていただくということも事務局の松本さんにやっていただいて。沼田委員長がおっしゃったように、とにかく月々遅れないように出すということが一番の課題でしたね。例えば総説なんか、医師にお願いしますと、忙しいからなかなか集まらないんですね。そういう時でも、事務局からしつこく催促していただいて締切には間に合わせることはできましたね。

沼田 そういうふうにしないとね。締め切りを守ってもらうというのは大変なことですね。

安生 そうです。それは言わないとやっぱりだめで、嫌な役は事務局にやっていただいてましたけどね（笑）。

司会 締切、これは雑誌の編集の宿命ですね。

岩崎 当時、なぜ手元に届くのが遅れたかというところ、最大の問題は金の問題だけなんですよ。

司会 といいますと…。

岩崎 日病薬には会員1人ひとりに会誌を送るだけの金がなかったということですよ。だから地方の病薬会長宛にまとめて送ったんです。その会長がその地区の会員に配ってもらうのです。そしてその各都道府県の役員は、「おまえの近所にこれを配ってくれ」とか、あるいはメーカーのプロパーに頼んで持たせてやるとか、そういうことをやっていたらしいですね。

司会 今も送料というのはバカにならないので節約するために今は、会員の施設ごとに送付していますが、各病薬単位というところまではちょっと考えてなかったで

すね。

岩崎 各病薬単位でやっておったんですよ（笑）。ドサッと各病薬に送る。各病薬では10日やそこらそのままにして（笑）、それを今度は頼まれた人もまたしばらく放っておく。

司会 そうということがあったからでしょうね、それと会費を納めている会員の数と、雑誌を送る数が違うんですよ。県病院薬剤師会がサバを読んで雑誌だけは多く持って行ってしまいうんですね。これを何とか改めないと、地方連絡協議会で、これからは会員名簿と会費ときちんと耳をそろえて納めてくださいとお願いしたら「そうすると各病薬の財政が成り立たなくなる」と反撃されましたけど。

安生 お金のことはもう全部、事務局のほうへ…（笑）。ただ、雑誌編集に一番お金がかかるというのは毎回いわれてましたね。さっきおっしゃっていた紙質の低下、もうそれはすごく言われましたね。

司会 大体、予算の半分は会誌に取られてましたからね。

岩崎 その弁解のために、ずいぶん方々へしゃべりに行かされました。

司会 そうですか（笑）。それともう1つ、ごく最近まで7、8月合併号というのがあって、年11回しか発行していませんでしたね。今の世の中に社団法人の会誌ともあろうものが、「お盆休みだから出せない」なんて言い訳は通らないというので、改めていただいたという経緯がありますね。

事務局 あれは北田委員長の時代でした。

現在の日病薬誌

司会 さて、安生委員長のあと細田委員長、北田委員長それぞれ各1期を経て、現在の山田委員長に引き継いでいただいているわけですが、現在の日病薬誌の編集方針についてお聞かせいただけますでしょうか。

山田 山田でございます。全田会長から編集委員長を担当するようにと命じられまして、それまでは鹿児島県の病薬会長をしておりましたが、日病薬の仕事に直接かわるということではございませんでした。只今、各時代の編集委員長のお話を伺って、現在との違い等を含めながら概略をご紹介させていただきたいと思っております。岩崎委員長時代の議事録を見ますと、1年間になんと17回も編集会議が行われております。それを見るだけでもびっくりというのが印象でございました。その後は、大体1ヵ月に1回、年12回くらいになり、そのあとさらに合理化され、年に6回になってきたわけでございます。現在は、

年4回になりました。そして、先程安生委員長からもお話がございましたけれど、ブロックの編集委員の方々と
の会議を含めて、現在は年4回ということになり、9月
にブロックの編集委員との合同会議を行っております。

お手元に今年の7月号と8月号を配布していただいで
おります。先程沼田委員長から表紙のお話がありまし
たが、現在はA4判にさせていただいております。

岩崎 A4判になったのは今年からですね。

山田 そうです、今年からでございます。この目次を
見ていただきたいのですが、実は堀岡名誉会員から、「こ
の目次がわかりにくいんだよ。よく見えるようにしなさい
」とご意見がございまして、目次を見開きにさせてい
ただきました。内容は、巻頭言、総説、特集、シリーズ、
論文、活動報告等の項目がありますが、この項目は、安
生委員長の時に、現在のスタイルが大体でき上がってい
たのだなと、ということが理解できました。それからも少
しずつ変わってきておりまして、先程申し上げました総
説、特集、シリーズ、論文、学会報告、活動報告、研修
報告、新刊紹介、Do you know?あるいは最近の文献情
報より、FIPニュースレター等、23項目のスタイルにな
っております。

そして、さらにわかりやすいようにということで、表
紙にも巻頭言、総説、特集、活動報告等、主な見出しを
掲載し、お忙しい方々の目を引きつけるように、一目で
わかるようにしようという方針でやらせていただいで
おります。

現在では、日病薬も36,000人近くの会員がおられます。
36,000人ということになりますと、全国津々浦々の、北
海道の端から九州の離島まで含めて、全会員と日病薬の
心のつながりを保つ絆として、この会誌が果たす役割を
考えますと、大変な責任を背負っていると感じておりま
す。IT時代と言われる現代、インターネットで皆さんに
お知らせしたらいいんじゃないかという意見もあります
けれど、やはり私は日病薬誌を会員の1人ひとりの方に
手にとって読んでもらう、心温まるものでなければいけ
ないと思っております。そういう思いで私は、編集委員
の人たちと日病薬誌の編集に取り組んでいるつもりで
ございます。

それと、あとからお話が出てくるのかもしれませんが
けれど、今年の1月号から病院薬剤師会の創立50周年とい
うことで日病薬の歴史シリーズとして名誉会員のなかで
10年以上役員を務めていただいた先輩方に回顧録をご執
筆いただき、連載いたしております。先程の岩崎先生の
記事も5月号に掲載をさせていただいております。

その時、その時代の病院薬剤師にとって重要な問題や

課題を取り上げているつもりです。少し前の号の特集で
は6年制への薬学教育改革問題等を取り上げたように、
時代の流れに対応したシリーズ、あるいは特集を取り入
れていきたいと考えていることをご理解いただけたら幸
いでございます。それと、論文の件について、岩崎委員
長時代は一般論文という表現になっておりましたですね。

岩崎 そうです。

山田 先程私が感銘を受けたのは、全国の小さな病院
で働いている会員の方々の投稿が論文や会員報告になる
ように、編集委員がお手伝いされていたというそのフィ
ロソフィーで、今も脈々と続いているということを強調
させていただきたいという思いでございます。

安生 山田委員長のお話がありましたけれども、私の
時もまずこの雑誌をよくするというで、いいものは
病院薬学ということではなく、日病薬誌にもいいもの
を掲載したいと思っておりました。ちょうど薬剤管理指
導業務が軌道に乗りかけているところですから、1例報
告のような投稿が多かったのです。それを論文として扱
うかどうかは結構、議論しましたが、このような報告は
今後ますます増えていくだろうということで、なるべく
論文としての形式にと指導して掲載するようにしてい
きました。ですから、投稿数が増えまして掲載までに6ヵ
月以上かかるというわけですね。ある会員からは6ヵ月
後に載ると思って、病院の業績集に掲載したら、載らな
かったとクレームが来たりしました。受理したものは早
く載せるように努力するとともに、受付日と受理日の両
方を記載するようにしまして、受理から掲載まで、どの
くらいの期間がかかるのか皆さんに把握しておいてい
ただくようにしました。

山田 病院薬学は現在「医療薬学」という誌名に変わ
って、日本医療薬学会（以下、医療薬学会）の学術雑誌に
なっておりますが、こちらにも投稿できるようにという
ことで、医療薬学の投稿規定と日病薬誌の論文の投稿規
定を合わせております。この日病薬誌には、論文発表の
トレーニングの場として、どんどん投稿いただけるよう
にと考えており、現在、年間130編の投稿が来ているとい
う状況でございます。130編もありますと、その審査が大
変で委員だけでは間に合いませんので、全国の大学病院
の薬剤部長の方をAレフリーとし、編集委員をBレフ
リーというように、2つのレフリー体制にしたところ、
審査が非常に早くなったということでございます。さら
に今、医療薬学会の認定薬剤師制度の認定に必要な単位
の問題もあり、緊急に掲載する特別掲載制度ということ
を私の委員長時代に始めさせていただきました。もう1
年くらいになります。最低3ヵ月くらいで掲載できるよ

うになっております。

レフリーはサポーター

岩崎 さっき山田委員長の言われたように、委員会を年に12回も行ったというのは…。

山田 17回でございました (笑)。

岩崎 17回も行ったというのは、集まってきた原稿をみんなで手分けして、字句から見ていったんです。中身の内容よりもまず字句…。1人読んでみて、また別の人が読んで、それで「どうしてやったらいいだろう」と、結局、編集委員を3人くらいずつABCというグループを作って、そのグループでもって直して、それを今度は全体で検討して、やっと印刷所へ回すということをやったので、委員が集まる回数は、実際にはもっと回数が多いんです。

山田 そうでしたか、資料を読ませていただいてびっくりしました。ご苦労が本当によくわかりました。

山田 そんな経緯、歴史があって日病薬誌も、だんだん立派になっていくわけでございます。

岩崎 今の日病薬誌は非常にいいですね、背表紙が付いて。

右川 この背表紙がね。

岩崎 これをつけるために厚生省の副作用情報とか、白じゃ目立たないから黄色いページにして入れて厚くして苦労しました。それに、第3種郵便じゃないと送れないというので、苦労して第3種を取るのに2年くらいかかった。

司会 現在は、その原稿の数が足りないなんていうことはもうないのでしょか。

山田 そういことはございませんですね。ただ、どれくらい載せるかということがございますけれども、大体7、8編載せていくということでございます。ただレフリーも少し厳しくなって、全くだめなのはお断りする

のも少しできています。

岩崎 言ってみなかったね「こんなじゃだめだよ」と… (笑)。

安生 私の時、1件だけリジェクトしましたよ。だめというか、他の雑誌に出していただきたいと。

司会 やっぱり、きちんと論文にレフリーがついているということで学会のほうでも、これを認定する時の単位として認めるということになっていきますからね。やっぱりそういうことは大事なことですな

山田 実際、それもどういことに問題があるかということも明記したうえでお返ししたり、また再度投稿してくださいと書いたり、基本的に全部私たちで直したり、まさに「てにをは」から直したりすることもあります。逆に、これはよくできているなという論文もあり、非常に開きがございましてね。

岩崎 開きなんてものじゃないですよ (笑)。もうそこらへ転がっている石ころとダイヤモンドくらいの (笑)。

安生 そういことがあって現在になっているということ。やっぱり岩崎先生のご苦労があって現在という。

インターナショナルになってきた日病薬誌

岩崎 この頃は一番下にJapanese Society of Hospital Pharmacyとなっていますが、その前はAssociationだったんです。日病薬誌を米国へ持って行って、米国病院薬剤師会のバイス・プレジデントのOddis氏に見てもらったら、Associationはおかしい、Societyのほうがいいよということですね。それで広島大学病院の福地坦氏と、相談してSocietyにしたんです。

山田 近頃日病薬誌に掲載された論文を海外誌に投稿されることがあるということがございまして、Journal Japanese Society of Hospital Pharmacyの略号を掲載することにしました。

岩崎 この雑誌の略号は作りましたよ。JJSHP。

山田 JJSHPだと国際的に通用しないといわれまして、右下にあるようにJ. Jpn. Soc. Hosp. Pharm.にしました。

安生 引用文献に略名で書きますでしょう。そうすると、他の分野のドクターなんかは、こんな雑誌ないよ、どこにあるんだということになって。

司会 なるほど。

岩崎 もう1つ聞きたいのだけど、雑誌とは別ですけど広報として日病薬の紹介を英文で書いたのを、PPI (パンパシフィックI) がシドニーであった時に幸保氏の提案とその実施に努められ日病薬が作った。そして第2冊目を作ってアメリカのMidyear Clinical Meetingの際



に配ったんですけれどね。えらく感謝されたんですけれど、それはもう今、ないですか。

事務局 ないんですよ、それが。

岩崎 古い薬学会館が表紙になっていて、そして日病薬の組織であるとか、その仕事の内容であるとか、それから会員がこうなっているとかということを全部英文で紹介したんですね。それほど厚くはないですけど。

山田 今年のFAPAはバンコクであり、再来年が横浜であります。だから横浜に向けてひとつ日病薬の英文のパンフレットを作っておいたほうがいいんだろうなと思いますね。

岩崎 紹介ですよ。

司会 そうですよ、そういうのがいるんですよ。

IT時代の会誌の使命は…

山田 1つお尋ねしてよろしいでしょうか。過去の議事録を読ませていただきますと、もう1つ見えてくるのが、最初、岩崎委員長がおっしゃいましたように「各病薬だより」というのがございました。もちろん、今もございませうが。

現在はその内容として、各種委員会、理事会、代議員会の議事録等がございませうけれど、それだけでは日病薬執行部の考え方までは、わかりづらいということで、今年7月号と8月号には全代会長から「日病薬の動き」を書いていただきました。日病薬の考え方といいますか、方針を会員に知らせていくということが重要だろうと思ふのです。その件に関して、昔と現在を比較してどうなにかお聞かせいただけたらと思ふます。

現状を先に申し上げさせていただきますと、今、インターネットが普及してきておりますので、どんどん情報は入ってきます。今度の特集号でも健康食品と薬物相互作用を特集として取り上げております。しかし、これに関することは、他の雑誌でも見ようと思えば見ることができませう。しかし、この会誌の一番大事なこと、日病薬の執行部が、今、どういうことを考えているのか、どういうことが問題であるかということ、これを会員の方々に知っていただくということが重要だろうと私は考えております。

そういうことで今度、各委員会の要点項目だけでも記載するように、常務理事会で決まったところございませうけれど、こう言ったことについて、ご意見をお聞かせいただけたらと思ふのです。

岩崎 私がやっている時は、日病薬の方針等にさくページ数が少なく、あまり満足していただけるものではなかつたように思ふますが、右川委員長の時代には

ページ数も増えたんですか。

右川 増えたけれど…。

岩崎 山田委員長のご質問に答えになるかどうかわかりませうけれども、講演を頼まれて地方に行った時に、日病薬誌が来ると一番ケツから読むんだという、それで「なんでっ」て聞いたら編集後記から読むというんです。実は、僕も悪い癖がありまして、文芸春秋を買うとケツから読むんです。あれ、非常におもしろいです、文芸春秋の編集後記は。そして、その書いている記者でしょうけれど、文芸春秋のことを批判しているんですよ。自分の雑誌とか会社のこととか、マスコミ媒体のこととか、世間のこと。ところが、この頃この日病薬誌を見て感心したのが、みんなレディス・アンド・ジェントルマンで非常にきれいごとの文章ばかりが書かれている。

以前、誰が会長を選んだ。今の会長は、どうして選んだんだ。それを知っている会員が何人いる、いたら知りたいものだ、なんて書いたらえらく怒られませうね。代議員の選定はこう、理事や常任理事そして副会長、会長等の選び方が全然わからない、そんな会が世の中にあるかっていうようなことを編集後記に書いたんです。

司会 日病薬誌というものは会員に情報を伝えるためにあることはわかるが、では、どういう情報を会員に伝えるのかが、会誌の課題だろうと思ふます。

会議の議事録等の情報を早く伝えるだけならば、インターネット上のホームページで十分まかなえると思ふますが、なぜそういうことがあったのかというその動機や理由まではわからない。起こった出来事や、議論した内容を解説した記事のようなものが、会誌には一番あつていのではないのでしょうか。テレビやインターネットが発達しても新聞や週刊誌はなくなるのと同じではないかと思ふのですが、いかがでしょうか。

岩崎 その通りだと思ふます。

安生 この一番最初の頁の「日病薬の動き」について解説して、なぜそういう動きになっているかということ、是非掲載してほしい、それも色頁で掲載してほしいとお願いしたら、これはお金がかかるから。薬事新報で私が気に入っているのはグリーンページです。まず、あそこだけ見ておけば最近の動きがわかる。今もあそこだけは必ず見るようにしているんですけど、そういう意味でとにかく目立つように、この色つきでというお願いをしたんですけど。でも、最近この頁はグリーンの色つきになってますよね(笑)。これを見てみると、日病薬は大体こんな動きになっているかなというのがよくわかる。

関口 年に4回くらいの時もあつたし、その前は、結



構、頻繁に書かれていたんです。現在は、専門薬剤師の話を解説していただいて、学校教育関係の話も書かせてもらってます。それと、委員会の活動もどうしているのか、会員に伝わらない面があるので、今後、継続して委員長に現在こういうことをやっている、あるいはこういう方針でやっているということを書いてもらおうと思っているんです。

安生 例えば、今なんか実務実習の受け入れ体制等、外野で見ても気になることについて、ここを見ればわかるようになるというんですね。

右川 山田委員長がおっしゃったことは、今話しているようなことを知りたいということですか。あるいは、我々の時代にどういふふうにやっていたかということですか。

山田 早くいえば、現在、全田会長以下、執行部がどういふことを考えて進んでいっているのかということでございます。ちょうど右川委員長の昭和62年頃にも、本誌について、日病薬執行部の基本方針等を解説して掲載されていたのではないと思ひましてね。

右川 確かにあったんですけど、結局、議事録的な報告に終始しちゃったんですよね、ですから皆さんが今お話しになったように、会員のためになるような、解説記事であるかということが載ってなかったということにございます。それはあとでもお話ししようと思ったんですけど、実際に今、若い方と日病薬の話をしていると、日病薬の会員になってどういふメリットがあるのかという意見が多いのですよ。

岩崎 それは前からですよ。とにかく、最初に会員になった人は百数十名しかいなかったんだから。

右川 それで調べてみたら、昭和51年頃も全く同じ話が出ていますね。今はインターネットとか、もうついていけないような時代ですから（笑）、若い人たちはホームページとかそっちのほうへ重点を置けという人も結構多いんですよ。

だからそういう人に聞くと会誌はいらないと、もっと

ホームページを充実させてくれと、今はインターネットでなんでも全部見られるんだからと、そういう話が返ってきちゃうんでね（笑）。

沼田 ただ、私もこの座談会に出席することになって、インターネットで日病薬のホームページにアクセスして見たんですね。はじめてなんですけど（笑）でも出てはきますけれど、やっぱり深さが無い。だから、それはやっぱり物足りないんですよ。

司会 そういうことがあったという事実だけが掲載されていて…。

沼田 トピックスとしての情報は得られるかもしれないけれども、深みがないんですよ。

安生 それに会員全員がアクセスするわけじゃないですから、やっぱりこの雑誌とは別の情報伝達ツールでしょう。

司会 会誌なら確実に会員1人ひとりに届きますからね。やっぱり一番大事なメディアだと思うんです。

安生 インターネットを積極的に見る人は見るけれど、見ない人は見ない。これはやっぱり手元に届くというメリットですよ。

山田 そうですね、おっしゃる通り。

安生 これが一番ですよ、やっぱりね。

右川 やっぱりそういう点では会員に知らせることというのをもっと具体的に、例えば委員会なら委員会で行っていることの表面的な問題ではなくて、こういう項目をやっているよというのではなくて、もっとこういう趣旨の基にこういうふうに行っているよということを少し会員に知らせたほうがいいかなと。

岩崎 載ってますよ、最近。だから非常に大判になってからは変わったなと思っているんですよ。

山田 もう1つ、日病薬は結構いい仕事をたくさんしていると思うんですよ。例えば薬学教育6年制の問題も、この日病薬の働きが大きかったと私は思うんです。しかし、日病薬がどんな努力や苦勞をして、この薬学教育6年制が実現したかを会員に十分理解いただけていない。この薬学教育改革の推進役は、日病薬だったんですよ。その経過を詳しく解説して、会員に知らせておく必要があるんじゃないかと思ひますよ。

沼田 その時代その時代の会の活動の方向性だとか、そこに至った経緯だとかということもやはりメッセージとして送り続けないと、日病薬の存在理由を理解してもらえないんじゃないか。

山田 薬学教育6年制は、誰かがやってくれたんじゃないで、日病薬がやったんだということを伝えないと、折角の努力が評価されない、もったいないという思いが

ございます。

安生 コンピュータの好きな方はインターネットさえあればと思うのですが、それはやはり会誌とは別だと思えますよね。

山田 そうですね、私もそのように思います。

司会 IT化が進んでコンピュータ全盛になっても、やっぱり会誌というのは絶対になくなってはいけないものだと思いますね。

山田 絶対いけません。さっき申し上げました、心のつながりです。日病薬と会員の。もうそれは絶対まちがいないことです。

岩崎 最近も日病薬誌はケツから読めっていうんです。ここだけ見ると大体のことがわかる。ここだけで日病薬の動きがわかる。これは事務局のほうの仕事まで全部わかるんですよ。だけど、最近は編集後記を書いている人がかっこいいことばかり書いているんだな。今の会長はバカだとか、そういうことを書かないんですよ（笑）。

山田 岩崎委員長、僕は編集後記を書いて、それについて色々お手紙いただくんですね。それで、ここまでちゃ

んと読んでいただいているのかと感激してたんですよ。今聞いてみると後ろから読む人が多いからかと、そんな…（笑）。

右川 岩崎委員長と僕らが一緒にやってたところの編集後記というのは、編集委員はなにを書いてもいいよということだったんですよ。

岩崎 3行論文と書いていたんです。今度、会長が変わったけれど、あの会長じゃ頼りないなんて書いてたんだ。新会長が怒ったこと（笑）。

司会 お話は尽きないようですが、時間の都合もございますのでこのへんで「日病薬誌創刊40周年記念座談会」を終わりたいと思います。皆さんに大変貴重な体験談やご意見を頂戴致しましてありがとうございました。これがきっかけになって、日病薬誌が会員にとって重要な情報源としてまた親しみやすい読み物として、愛読されるものになることを期待致しまして、この座談会を終わりたいと思います。

本日は大変ありがとうございました。

座談会を終えて

この創刊40周年記念座談会は、関口専務理事のご挨拶の後、加野顧問の司会の下に昭和40年の創刊以来編集委員長を務めていただいた方々にお集まりいただき、自己紹介の後、和やかに始まりました。私は入手できた昭和49年からの議事録で、日病薬誌にかかわる経緯を勉強させていただき出席致しました。会が始まると岩崎氏が、創刊当時のご苦労話を昨日の出来事のようにユーモラスにお話され、楽しく聞かせていただきました。その当時は、編集委員会が年に17回も開かれる等、委員の方々のご苦労は並々ならぬものがあったのだらうと思います。岩崎氏や右川氏は、その日々も今では楽しい思い出とし

て心に残っておられるようでした。加野顧問の絶妙なる司会で、あっという間に予定の1時間半が過ぎてしまいました。また、沼田氏や安生氏のお話を通して、歴代の編集委員のご苦労はもちろんのこと、多くの会員の方々に支えられて、今日の日病薬誌があることを痛感致しました。ご出席の方々から、今後、どんなに時代が変わろうとも、本誌が日病薬と会員との“心の繋がり”となるよう期待されつつ、本座談会を閉会致しました。会員の皆様には、この座談会の話から、日病薬誌の使命と歴史の重みをご理解いただければ幸いに思います。

現日病薬誌編集委員長 山田勝士

歴代委員長：久保文苗（昭和39年8月～40年3月）、山本恒夫（昭和40年11月～42年12月）、水野謹爾（昭和43年～44年3月）、岩崎由雄（昭和44年10月～55年）、福地多久郎（昭和56年）、伊藤進（昭和57～58年）、右川和夫（昭和59～62年）、杉原正泰（昭和63年）、加野弘道（平成元年）、沼田とみ（平成2～5年）、安生紗枝子（平成6～9年）、細田順一（平成10～11年）、北田光一（平成12～13年）、山田勝士（平成14年～19年）
（敬称略）